

李 南瑾

1. 事業実施の目的

日韓次世代学術フォーラム第 16 回学術大会での研究発表

2. 実施場所

韓国京畿道烏山市（ハンシン大学）

3. 実施期日

2019 年 6 月 28 日（金）～2019 年 7 月 1 日（月）

4. 成果報告

●事業の概要

報告者は韓国京畿道烏山市で、2019 年 6 月 29 日～6 月 30 日の二日間にわたり開催された日韓次世代学術フォーラム主催の第 16 回学術大会において研究発表を行った。

日韓次世代学術フォーラムは、人文社会分野において日韓両国の新たな時代を担う次世代研究者に研究発表と相互交流の場を提供することにより、両国のこれらの分野における研究活動を底上げし、更なる活性化を目指すことを目的とする。毎年 1 回の開催を予定する国際学術大会において日韓両国の次世代研究者が場を共にし、自らの学問的な関心事や研究テーマを発表し、討論し合うことにより、相互の研究状況に対する理解を深めるとともに、自らの研究視野を広げることが期待される。

第 16 回目を迎えた今年度のテーマは「東アジア文化コンテンツの過去と未来」で、「国際関係」、「政治・法律」、「経済・経営」、「歴史」、「言語・文学」、「社会・ジェンダー」、「宗教・思想」、「民族・人類」、「文化・芸術」という 9 つの分科会から構成されていた。

報告者は「民族・人類」という分科会に参加した。この分科会（6 月 30 日 9 時 30 分～18 時）では、宗教と芸術、観光、社会福祉、移民、民俗芸能などを扱った以下のような内容の研究発表があった。

柳田民俗学の形成が近代神道史の展開と不可分な関係にあったことを明示し、そこからあらためて「民俗学』を捉えなおした研究、青海省・同仁県地区におけるタンカ（仏画）を中心に、チベット仏教の美術と信仰をあつかった研究、日本の民族芸能として盆踊りが無形文化遺産化された事例から、無形文化遺産制度が現地の人びとの実践に与える影響を扱った研究、神戸関帝廟で行われる普度勝会といった中国民間信仰の儀礼が、いかに神戸華僑の共生空間を構築しているかを明らかにした研究、1900–1910 年代における韓・中両国の女子留学生団体と出版物をめぐる比較研究、多様な背景を持つ成員によって構成される同郷団体維持されてきた関西喜界町郷友会の事例から成員間の関係性について考察した研究、東京都青梅市にある武州地獄山の宿坊の特徴について、韓国のテンプルステイとの比較から明らかにした研究、である。

民俗学、人類学の分野の研究者交流が実現したが、研究分野の異なる研究者からの質問や

コメントが少なかった点は少々残念であった。

●学会発表について

日韓次世代学術フォーラム主催第 16 回学術大会の「民族・人類」分科会で、報告者は「民族工芸と観光をめぐる人類学的研究—中国雲南省大理自治州周城における絞り染めを事例にして」というタイトルの発表を行った。

雲南省大理自治州周城の絞り藍染めは、2006 年に中国無形文化遺産として登録されたこともあり、ペー族の伝統的な民族工芸として一般的に認識されている。さらに、1990 年代後半以降、大理地域で観光化が進むにつれ、絞り染めはペー族の代表的な観光商品になった。

こうしたなか、周城の無形文化遺産制度と観光客によるステレオタイプのなまざしにより、「本物」のペー族の絞り染めをめぐる言説がすでに構築されている。だが、絞り染めの真正性をめぐるこの言説は、絞り染めをめぐる歴史、自然環境、およびそれに従事するペー族たちの日常生活の実践からは切り離されたところでできあがったものである。したがって、周城において何が「本物」の絞り染めであるかをめぐっては、文化遺産制度側による言説と、ローカルな実践者側の意識との間にズレが生じている。

以上の問題意識を踏まえ、発表者は、まず、改革開放政策以降、ペー族の絞り染めをめぐる公的な言説を分析し、ペー族および彼らの絞り染めをめぐる表象を明らかにした。そのうえで、現地調査を通じて、周城におけるペー族自身による絞り染めの諸実践と彼らが考える「真正性」の多声性を描き出した。つまり、周城というローカルな社会において複数存在する真正性のあり方とその基準を検討したのである。

●本事業の実施によって得られた成果

国際的な研究大会に参加することで、若手研究者間で研究成果を共有できた。コメンテーターは、報告者の発表について真正性の問題に焦点を当てたコメントがあった。それによって、報告者は、「真正性」という学術的な概念を使用した時、それを自らの研究でより明確に位置付けることが重要であると気づかされた。今後は、研究大会で研究者たちから得たコメントおよびアドバイスを基に、これらの発表原稿を学術論文にまとめて雑誌に投稿することを目指す。

●本事業について

国際学会での発表という貴重な機会を頂きありがとうございます。